

Dino Buzzati *SETTE PIANI*

ディーノ・ブツァーティ

「七つの階」

ブツァーティ読書会
浅見滄子 訳



汽車で一日の旅の後、ジュゼッペ・コルテは三月のある朝、その有名な療養所のある市に到着した。少し熱があつたが、駅から病院までの道をスーツケースを持って歩いて行くことにした。

ただ初期症状があっただけにも拘わらず、ジュゼッペ・コルテは、その病気を唯一専門に治療するこの有名なサナトリウムで診てもらうよう勧められたのだった。つまりそこでは、特別な専門的な能力を持つ医師と、なおかつ最も有効的な設備が保証されていた。

その病院を遠くから見た時——案内のパンフレットで写真を見たことがあったのでそれと解っていたが——ジュゼッペ・コルテはとても良い印象を持った。七階建のその白い建物は規則正しく畝状に出入して、ホテルを思わせるような外観だった。まわりは全て高い樹々に囲まれていた。

簡単な診察が済んだ後、入念な検査を待つ間に、ジュゼッペ・コルテは最上階の七階の明るい一室に案内された。家具調度品も壁紙と同じように明るく清潔で、木製の肘掛け椅子やクッションは色鮮やかな布地で覆われていた。眺望は市界隈の一番美しい一つの上に広がっていた。全てが安心して元気づけられるようだった。

ジュゼッペ・コルテは、すぐさまベッドに入り、枕元の明かりをつけ、持って来た本を読み始めた。しばらくすると看護師が入って来て、何か必要な物はないかと尋ねた。

ジュゼッペ・コルテは、特に必要な物はなかったが、その若い看護師に自分から進んで話しかけ、この療養所のようすを尋ねた。この病院の少し変わった特徴のことを知った。病人達は、病の重さによって階ごとに分けられていた。七階、つまり最上階は病状の軽い者、六階は重くはないが放って置くことの出来ない病人にあてられた。五階はすでに本格的な疾患を治療するというように、階から階へと進み、二階は非常に重い病人がいた。一階は望みのない人達だった。

この独特のシステムは、仕事を非常に迅速にするだけでなく、軽い病人が、近くに臨終の病人が居ることで動揺させられることを

防ぎ、それぞれの階に同じような雰囲気を保っていた。一方で治療は完全な形で階ごとに分けられていた。

病人が七つの斬進的な階層に分けられた理由である。各階は、それぞれ独特の規則と、独特のしきたりを持つ、一つの小さな世界のようなだった。各階は、一人の医師に任されていたので、院長が病院全体に的確な方針を定めていたが、治療の方法には少々の、しかしはっきりした違いがあった。

看護師が出ていくと、ジュゼッペ・コルテは、熱も引いたように思えたので、窓際に近寄り、外を眺めたが町のパノラマを特別見るわけではなく、階下の病人達を窓から見られないかと、期待したからだだった。大きく出入りした構造の建物が、そうした観察を可能にしていた。ジュゼッペ・コルテは、特に遠くに思えるような、斜め下に見える一階の窓に注意を集中させた。しかし興味を引くようなものはなかった。大方は灰色の巻き上げ式の錠戸で、ぴったりと閉ざされていた。

コルテは、隣りの窓から一人の男が顔を出しているのに気付いた。お互い共感を募らせながら、しばらく顔を見合わせていたが、どうしてこの沈黙を断てばいいか、解らなかった。ついにジュゼッペ・コルテは、勇気を出して言った。「貴方も此処へいらっしゃったばかりですか？」

「おお、いいえ」相手は言った。「私はもう二ヶ月になります…」
暫し沈黙した後、どう話を続けようかと戸惑いながら付け加えた。

「下にいる私の兄を見ていたのです。」

「あなたのお兄さん？」

「ええ」その見知らぬ男は説明した。「私達は一緒に入ったのです。本当に珍しいケースで、でも兄のほうは、悪化が進んで四つめにいるのです」

「四つめって何ですか？」

「四つめの階です」と説明したが、その言葉を口にした時の痛ましく恐ろしい表現に、ジュゼッペ・コルテは、ぞっとしてしまった。

「でも、四階はそんなに重いのですか？」と注意深く尋ねた。

「おお、神よ」相手はゆっくりかぶりを振りながら「まだ、全く絶望的と言うわけではありませんが、あまり安閑とはしてられないのです」

「じゃあ」とコルテは再び訪ねた。自分とのかかわりのない痛ましいことを、冗談めいた気楽さで「それじゃ、四階で、そんなに重いのなら、一階ではどんな人がいるんでしょうね？」

「おお、一階は、全く瀕死の病人で、下の階では医者も、もうなすすべもなく、仕事をしているのは神父さまだけで。もちろん…」

「でも、一階には少ししかいないのでしょうか？」ジュゼッペ・コルテは、相手をさえぎり、確認を急ぐかのように、「下の階の部屋はほとんど全てが閉まっていますよ」

「少ないですね、今は、でも今朝はかなりいました」その見知らぬ男は、かすかに笑みを浮かべ答えた。「ご覧なさい、あの鎧戸が降ろされているところは、誰か亡くなって間がないのです。しかしながらご覧なさい、他の階では全て扉が開かれていますでしょうか？では、失礼」彼はゆっくりと身を退きながら、「冷えてきたようですね。ベッドに戻ります。お大事に、お大事に…」

男は窓際から消え、勢いよく窓を閉じた。それから部屋の明かりがつくのが見えた。ジュゼッペ・コルテは、まだ窓際に立ったまま、一階の閉じられた鎧戸を、じっと見ていた。病的なまでの激しさで、じっと見ていた。やがて死に至る患者が閉じ込められた、恐ろしい一階の葬儀を想像しようと努めていた。そしてそこが、このように遠いことを知り、気が楽になるような気がした。そうしているうちに、市の上には夕闇がたれこんできた。ひとつ、またひとつ、とサナトリウムの無数の窓に明かりが灯り、遠くからは祭りごとのある館のように見えたことだろう。下の奈落の底の一階だけは、何十の窓が光のない闇のままだった。

全般的な検査の結果は、ジュゼッペ・コルテを安心させた。だいたい悪い方に予測しがちな彼は、内心すでに厳しい宣告がされたとしても、医師から下の階に入る必要がある、と告げられても驚きはしないだろう。事実、全体的な状態は良かったにも拘らず、熱は消えそうになかった。むしろ、医師は心のこもった言葉で励ましてくれた。病の初期症状はありますが、しかし極軽いものです。二、三週間もすれば、たぶん全て良くなるでしょう。

「じゃあ七階にいていいのですね？」とジュゼッペ・コルテが気になっていたこの一点を尋ねた。

「勿論です！」医師は親しげに、手で彼の肩を叩いて答えた。「それで、何処へ行くとお考えになったのですか？もしかして四階？」と非常に馬鹿げた思い込みだと言わんばかりに笑いながら尋ねた。

「いえ、いえ、このままで」とコルテは言った。「そうでしょうか？病気になると、やはり非常に悪い方に想像するでしょうから…」

ジュゼッペ・コルテは事実最初に割り当てられた部屋にとどまった。時には起き上がる許可が出た午後には、何人かの病院の仲間と知り合った。そうして早く良くなるように細心の注意を払い、治療を受けた。しかしそれにもかかわらず、彼の体調は変わらないままだった。

十日ほどたった頃、ジュゼッペ・コルテの所へ七階の看護師長がやって来て、誠に好意的に、一つお願いがあるのですが、明日、二人の子供を連れてご婦人が、この病院に入って来られます。と言うことだった。貴方の隣に二つ空いているのですが、三つ目がありません。と彼に同意を求めるように、そこでコルテさん同じように快適な別の部屋に移っていただけないでしょうか？

ジュゼッペ・コルテは無論異論はなかった。部屋が他の部屋であろうと、彼には同じであった。それどころか新しいより愛想の良い看護師に当たるかもしれないと。

「心から感謝を」と看護師長は軽く頭を下げ、「この様な優しい騎士道的な好意を、貴方のような方から頂いて驚きに堪えません」と言った。「一時間もしたら、もし貴方に何も差し障りが無ければ、移動の手続きをしたいのですが。それから下の階に降りていただきますので」と特別にまったくどうでもよいことのように、小声で付け加えた。「生憎この階には空いた部屋がございません、がまったく一時的な措置です。」コルテは衝撃的に立ち上がり、抗議の口を開こうとしているのを見て、「まったくの一時的な措置です。どこか空き次第、そうですね、二、三日の内に、貴方は上に戻られると思いますから」

「はっきり申しまして」ジュゼッペ・コルテは、子供ではないことを示す為に、笑みを浮かべながら言った。でも、「はっきり申しまして、この様な移動は、私はまったく気にいりません」

「でも、この移動には、何等医学的な理由があるわけではございません。貴方のおっしゃりたいことは良く解ります。このご婦人のお子さん達と、離れたくないと言うことへの唯一の好意ですから…お願い」と明るく笑いながら付け加えた。「他に理由がある等考えないでください！」

「そうかもしれませんが」とジュゼッペ・コルテは言った。「しかし、私には不吉な前兆のようで」

こうしてコルテは六階に移った。この引越が病気の悪化によるものではない、と納得していたが、彼と健康な人の普通の世界との間には、すでに明白に障壁があったのかと思うと、心安らかではなかった。到着の港七階は、まだ人間の慰めの言葉に触れる確かな世界、と言うよりは、むしろ長く住み慣れた世界の延長と考えられた。しかし六階は、すでに正真正銘の病院の範中だった。医師や看護師と患者自身の気持ちは幾分違っていた。この階には、重くないと見られるにもかかわらず、正真正銘の特別な患者として受け入れられることが認められていた。部屋の近くの医師や職員の人達と最初に話

したことで、ジュゼッペ・コルテは、七階の部門が、何よりも気紛れと言う病気の素人専門のように、冗談のように受け止められていることを知った。六階からこうして本当に始まるのだった。

ジュゼッペ・コルテは上の階に戻るには、彼の特有の病からして、確実に何等かの困難に会うことを理解した。彼が七階に戻るには、最小の努力でも組織を動かさなければならないことを知った。彼が口を開かない限り、（あの健康な人達）のいる階へ再び移らせようと、考えてくれる人は誰もいないことは、疑いなかった。

ジュゼッペ・コルテは、それゆえに自分の権利を放棄しないこと、慣れの誘惑に屈服しないこととした。その階の仲間には、ここにいるのはほんの数日であること、あるご婦人への好意で下の階へ降りることを彼自身申し出たこと、部屋が空き次第上の階に戻ることが出来るはずである、などはっきりさせるように話した。他の者たちは、興味なさそうにその話を聞き、あまり納得がいかないままに頷いていた。

ジュゼッペ・コルテの確信は、新しい医師の診断の中で十分に確実なものにされた。そして医師も、七階に入られるのが当然である事を認めた。貴方の症状は、非、常、に、軽、い、と明確にするために、もったいをつけて、言葉を区切って話した。しかし、つまり、ジュゼッペ・コルテの治療には多分六階の方がいいでしょう、と言うことだった。

「こんな馬鹿げた作り話は結構です」と病人は遮るようにはっきりと、「貴方は私に、七階が私の場所だとおっしゃったじゃないですか、そこに戻りたいのです」

「誰も反対と申しているにはありません」医師は訂正した。「ま、た、く、医、者、としてではなく、本、当、の、友、人、としてご忠告申し上げたまでですが！もう一度申し上げますが、貴方の症状は、極軽いのです。大げさに言うわけではありませんが、貴方は病気ではないでしょう。しかし、私が見ましたところ、ある確かな広がり大きさは、類似した症状とは異なります。説明させて頂

きますと、病状の強さは最低ですが、考慮に値する広がりがあります。細胞破壊の進行は」ジュゼッペ・コルテがこのような不吉な表現を病院の中で聞いたのは初めてだった。「細胞破壊の進行はまったく初期です。多分始まってすらいないでしょう。しかし、仮定ですが、あくまで仮定で申して、組織の広い部分に広がり初めています。つまり、私が見ますところ、これのみのため、ここ六階での強力な効果的なやり方が、貴方に、より効果的な治療が受けられると思います」

ある日、医師たちの長時間にわたる協議の後、院長から患者の区分を変更する決定がなされた、と報告があった。それぞれの等級が——いわば——半階級下げられた。各階の病人はそれぞれの病状の重さによって、二つのカテゴリーに分けられた。(この区分けは、それぞれの医師によってなされた。しかもこの方法は、もっぱら病院独自のものだった。) 下の階の半分は、更に下の階に事務的に移動させられることとなった。例えば六階の病人の半分、病状の少し進んでいる人は、五階に、また、七階の軽くない人半分は六階に移らなければならなかった。この知らせはジュゼッペ・コルテを喜ばせた。何故なら、この様に見て複雑な移動なら、彼の七階に戻ることを成功させるのは、非常に簡単だろうと思ったからであった。

この彼の期待を看護師に話したとき、しかし彼は、驚くほど苦い思いをした。つまり移されることは移されるのだが、彼は、まさしく下の階であることを知った。看護師の説明できない理由で、彼は、六階のより(重い)半分にいれられ、五階に降りなければならなかった。

最初の驚きが過ぎ去ると、ジュゼッペ・コルテは、怒り狂い、このペテン師、これ以上下の階に移る話は聞きたくない、さもなければ家に帰る、病院の事務局に、医師の診断をゆるがせにして、このような凶々しい移動をさせる権利はないと、喚き散らした。

彼がまだ喚いていると、医師が彼を静めるためにやって来た。熱の上がるのを望まないならば静かにするようと、コルテにすすめた。大方、部分的な間違いから生じたことを説明した。ジュゼッペ・コルテの、まさにいるべき場所は、七階だと再び認めた。しかし彼のケースについては、個人的には少々異なった考えを持っています。と付け加えた。つきつめると貴方の病気は異常な広がりから、六階と考えられた。医師自身も、どうしてコルテがこのように、六階の半分のリストになったのか、説明がつかなかった。丁度あの朝、電話でジュゼッペ・コルテの病気の正確な状態を尋ねてきた事務局の事務員が記入を間違えた、もしくは精通した医師が患者を余りにも寛大に扱うので、事務局の指示により、意図的にいくらか〈さげた〉のだろう。医師は最後に、コルテに心配しないで、抵抗しないで移動した方がいいと、助言した。問題は病気であって、病人が何処に入れられるかではないと。

治療に関しては――医師はさらに付け加え――ジュゼッペ・コルテは何も悩むことはないでしょう。下の階の医師は非常に経験豊かだし、事務局の案内だと下に行くほど医師団の能力は高くなるというのが原則である。部屋は同じように美しく快適で、眺めも同じように広々としていて、視線が樹々の囲いから遮られるのは三階から下です、と。

ジュゼッペ・コルテは、夕方から熱にうかされるままに、疲れが増すとともに、細々とした釈明に、ただ聞くだけだった。すでに不当な部屋替えにさらに抵抗する力が、失せているのに気付いた。そして、下の階に抵抗することなく運ばれた。

哀れなものであったが、ジュゼッペ・コルテの唯一の慰めは、五階に来てみたら、医師も看護師も患者達も一致して認めるように、彼は、この階では皆の中では重くないことを知った。要するに彼は、この階の誰よりもはるかに、より幸せであると考えさせられた。しかし、一方、彼は自分とあの健康な人との間に、二つもの障壁が設けられているという考えに悩まされた。

春も深まりいくらか陽気も暖かくなかったが、ジュゼッペ・コルテは、最初の頃のように窓から顔を出すことを、好まなくなった。こうした恐れは全く馬鹿げていたが、彼は、かなり近くなった一階の大部分の窓がいつも閉まっているのを見ると、奇妙な震えが続き、完全に錯乱してしまった。

彼の病状は、安定しているように見えた。ところが、五階に移ってから三日後、彼の右足に発疹が現れ、数日たっても治る徴候を示さなかった。この疾患は、――医師の言うには――主たる病気からではなく、完全に独自のもので、この世の最とも健康な人に起こる不調です。数日で取り除くには強力なディガンマー線の治療が必要だろうということだった。

「ここではディガンマー線の治療は受けられないのでしょうか」とジュゼッペ・コルテは、尋ねた。

「もちろん」医師は同意を得たとばかりに「勿論我々の病院では、全て揃っています。ただ一つ不便なことに…」

「何でしょうか？」ジュゼッペ・コルテは漠然と不吉な予感がして、言った。

「不便と申しましても」と医師は言い直して「申し訳ございませんが、その光線の設備が四階にしか置いてない、ということで、私としては、一日に三回も通うのは、お勧めしたくないのですが」

「じゃあ、だめなんですか」

「ですから、恐縮ですが発疹が消えるまで、四階に降りていただく方が、良いと思いますが」

「もう、いい！」ジュゼッペ・コルテは怒り狂ったように叫んだ。「もう絶体の下なんかには降りない！死んでも四階なんかには行かない！」

「貴方のお考え通りに」医師は興奮をなだめるように、「しかし担当医師として一日に三回も下に行くことは禁ずるということもご留意ください」

困ったことに、発疹は弱まるどころか、ゆっくりと広がっていた。ジュゼッペ・コルテは、不安に襲われながら、ベッドで寝返りを続けていた。屈服するまで三日間怒り続けていた。そしてついに自分から光線の治療を受けるため、下の階に移ることを願い出た。

この階では、コルテは例外的な存在であることを知って、密かな喜びを覚えた。この階の大方の患者の病状は重く、ベッドから出ることは出来なかった。それにひきかえ、看護師の驚きとお世辞のなかを、自分の部屋から光線を受ける部屋まで、歩いて通える贅沢を手に入れた。

新しい医師に、彼は自分の非常に特殊な立場を明らかに主張した。本来ならば七階にいてもいい患者が、たまたま四階にいるのだ。発疹が消えたら、彼は上に戻るつもりである。何等新しい言い訳は絶体に受け入れないだろう。彼はまだに七階に戻ることが当然できるのだ、と。

「七階に、七階に！」丁度診察を終えた医師は、笑いながら叫んだ。「いつもあなた方患者さんは大袈裟なんだから！私は初めに申し込んでいるでしょう。どうぞ貴方の状態に満足してください、と。カルテを見ましたところ、大きな変化はありませんでした。しかし、これと七階という話は――卒直に気まずいことも申し上げるとを、お許してください――この病には確かな違いがあります！貴方はあまり心配の必要のないケースです。が貴方はやはり病人です！」

「それでは、それでは」ジュゼッペ・コルテは、全たく火が付いたような表情で、「先生なら私をどこに、入れられますか？」

「おお、神よ、それを言うのは容易ではありません、貴方をまだ少ししか診ておりません。私の考えを明らかに申し上げるには、少なくとも、一週間は様子を見なければなりませんでしょう」

「なるほど」コルテは執拗に「それでも、おおよそのことなら、お分かりでしょう」

医師は、彼を安心させるために、考えるふりをし、頷くと同時にゆっくりと言った。「おお、神よ！貴方の満足がいくなら、ここ六

階にいてもらいましょう！そう、そう、」自分に言聞かせるように「六階ならば大丈夫でしょう」

医師はこれで、患者が喜ぶと確信していた。それにもかかわらず、ジュゼッペ・コルテの表情には、はっきりと失望した表情が認められた。最初の階の医師達は、患者をだましていたことを知った。ここ、この新しい医師も、もっと有能でもっと親切な医師も、心の中では、七階ではなく五階に、おそらく五階の下のカテゴリーに入れている！思いがけない失望感がジュゼッペ・コルテを打ちのめした。その夜、著しく熱が上がった。

四階にいた頃が、病院に入院して以来ジュゼッペ・コルテにとって、最とも穏やかに過ごした時期だった。医師は感じがよく、思いやりのある人物だった。そして様々な話について、お喋りに付き合ってくれた。ジュゼッペ・コルテも、また弁護士としてまた社会の一員として、日々の生活に関わりのある話を選んで、自分からも喜んで進んで話した。彼は、まだ自分が健康な人間として、まだ仕事の世界に関係があること、世の中の事柄に心から関心があることを、自分に納得させようと努めた。が、努めはしたが成功せず、いつも最後は常に、彼の病気の話に落ち着くのだった。

病気が良くなりたいという願望は、ジュゼッペ・コルテの執念に変わっていった。ディガンマー線は皮膚の発疹の拡散は食い止めたが、残念なことに、それを取り除くことは、出来なかった。ジュゼッペ・コルテは毎日医師と長く話し、その対話の中で、全力をあげて、自分を強く、それどころか、皮肉が言えるほどに見せようとしたが、成功しなかった。

「ところで、お医者さま」ある日言った「私の細胞破壊の進行はどうなのでしょう？」

「おお、何てひどい言葉を！」医師はおどけるように咎めた。「いったいどこで覚えたのですか？いけません、いけません、特に患者にとってはよくありません！これ以上貴方からそんな言葉を、聞きたくありません。」

「分かりました」コルテは異議をを申し出るように「まだ先生から、お返事をいただいておりますが」

「おお、すぐお答えします」医師は丁寧に言った。「貴方の恐ろしい表現を繰り返せば、細胞破壊の進行は、貴方の場合は、最小、全たくの最小です。しかし、頑固だと判断せざるを得ません。」

「頑固、慢性、とおっしゃりたいのですか？」

「私が口にしなかったことを、言わせないでください。私は、単に頑固だと申し上げただけです。大抵の場合そのようです。非常に軽い疾患でも、効果的な治療を長期にわたり続ける必要があります」

「じゃあ、先生、いつ良くなるという希望がもてるのでしょうか？」

「いつ？このようなケースの場合、予測することはどちらかと言えばむつかしい…しかし、いいですか」暫し考えにふけた後、「貴方が本当に、良くなりたいと心から願っていらっしゃることは、よく解ります…もし、貴方を怒らせても良ければ、どのようなことを、お勧めするか、お解りになりますか？」

「どうか、おっしゃってください。お医者様」

「それでは貴方の質問に限り、はっきりと申し上げます。もし私が、この病にかかって、しかも極軽くても、多分今ある病院の中で、この最高のサナトリウムに入院したら、最初の日、最初の日ですよ、お分かりになりますか？最とも下の階の一つに、自分から申し出て入れてもらいます。ためらうことなく、入れて…」

「一階？」コルテは無理に笑みを浮かべて問いただした。

「おお、違います！一階になんてとんでもない！」医者は皮肉っぽく答えた。「それは違います！が三階、もしくは二階でも。下の階は最とも優れた治療ができます。保証します。設備は完全で、強力ですし、医師は有能です。それで貴方この病院の中心になる人が誰だかご存じですか？」

「ダーティ教授ではありませんか？」

「そう、ダーティ教授です。ここで採用されている治療の考案者も教授です。いいですか、彼は大先生です。言わば、一階と二階の中間にいらっしゃる。彼の強い指導力は、そこから発揮されているのです。ところが、私が請け合ってもいいですが、彼の影響力は、三階までには届きません。それ以上は彼の指示が、ばらばらになり、効力を見失い、ずれてしまう、と言ってもいいでしょう。この病院の心臓部は下にあり、最高の治療を受けたいならば、下にいることが必要です。」

「で、ようするに」ジュゼッペ・コルテは震える声で「じゃ、先生、私に勧めらるのはい…」

「一つ付け加えさせていただきたい」医師は冷静に続けた。「つまり、貴方の特殊なケースは発疹にも注意しなければならないということです。大したことではないという、この点では、私も同感です。しかし、どちらかと言えば厄介なことです。長引くと、貴方の気力を低下させることになります。回復には精神的な安定が重要であることは、ご存じですね。私が貴方に施した放射線は、半分しか効果がありませんでした。どうしてでしょう。全くの偶然かも知れませんが、放射線が十分に強くなかったのかも知れません。で、いいですか、三階の放射線の装置はもっと強力です。多分貴方の湿疹が治る可能性が非常に高いでしょう。で、いいですか？一度上り始めたら、再び後戻りすることはないでしょう。貴方がとても良くなったと感じるようになったら、私たちの所へ再び上がるか、もしくはもっと上、いや貴方の成績如何で五階、いや六階、さらに七階までも、邪魔だてするものは何も無いでしょう…」

「で、先生は治療がこれで早まると、お思いですか？」

「疑いありません。私が貴方の立場だったら、どうするか、すでにお答えした通りです。」

医師はこうした話しを毎日ジュゼッペ・コルテに話した。ついに病人が湿疹に疲れ苦しみ、下に降りることに気が進まないにも拘わらず、医師の勧めに従い、下の階に移ることに決めた。

三階に来てすぐ、そこでは憂慮すべき患者が治療を受けているにも拘わらず、医師も、看護師も、独特な明るさがあるのを感じた。さらに日に日にその明るさが、増してくることに気付いた。看護師と少し親しくなった後、好奇心に駆られ、どうしてこんなに、みんな楽しそうなのか尋ねた。

「あら、ご存知ない？」と看護師は答え「三日後から私たち、バカンスに行くのです」

「なんですって、バカンスに行くって？」

「ええ、そうです。十五日間、三階は閉めて、みんな気晴らしに行くのです。休暇は階ごとに交代で取るのです」

「患者たちは？どうするのですか？」

「ここは比較的少ないので、二つの階が一緒になります」

「どうして？四階と三階の患者をまとめるのですか？」

「いえ、いえちがいます」看護師は訂正した。「三階と二階です。この階の人達が、下に降りなければなりません」

「二階に降りる？」ジュゼッペ・コルテは、死人のように青ざめた顔で、言った。「それでは私は二階に降りなければならぬのですか？」

「ええ、勿論、何か変ですか？十五日後私たちが戻りましたら、貴方はこの部屋にお戻りになれます。驚くことはないと思います」

ところが、ジュゼッペ・コルテは——本能的に感づいたのだが——惨たらしい恐怖に襲われた。しかし、病院の職員たちが、バカンスに行くことを止めるわけにもいかず、新しい治療のより強力な放射線が良く効くのだ、と納得した。——湿疹もほとんど完全に消えていた——彼はまたしても新しい移動をさせられることに、反対しなくなった。しかし、看護師のからかいにも拘わらず、“ジュゼッペ・コルテ、三階から一時的”と書いて新しい部屋の扉に張り付けて欲しいと、要求した。こんなことは、この病院の歴史では起きたことの

ないことだった。しかし医師たちは、コルテの神経質な体質では、少しの障害でも、怒らせると大きなショックを招くだらうと、反対しなかった。

つまり、十五日間、一日より多くもすくなくも待つだけだった。ジュゼッペ・コルテは、数時間もベッドに横になったまま、彼は家具の上に視線を向けたまま、頑なに日にちを数えた。二階の家具は上の階ほど、モダンで華やかではなかったが、大きさは、より大きく、形は重厚で厳めしかった。また、時々耳を澄まし下の階の様子を聞いていた。下の階には瀕死の”最後を宣告“をされた患者の苦痛の喘ぎ声、うわ言が聞こえるような気がしていたからである。

これ等の全てのことは、当然彼の気持ちを滅入らせる結果に貢献した。穏やかではない心は、病が重くなるのを速め、熱も上がる傾向にあり、全般的に、見るからに衰弱が深まった。窓からは——今や夏も盛りで窓は常に開け放たれていた——もはや町の屋根も家並も望めず、ただ病院を取り囲む樹々の緑の壁が見えるだけだった。

七日後、午後の二時頃、突然、看護師長と三人の看護師が、手押し車輪の付いたベッドを押して入って来た。「引越しの準備は出来ていますか？」と看護師長は軽い口調で優しく尋ねた。

「引越し、なんですか」ジュゼッペ・コルテは、ひ弱い声で尋ねた。「またその様な冗談を？三階の人達は七日後まで、戻って来ないのではありませんか？」

「三階の、なんですか？」看護師長は何のことだか、解らないと、いうように言った。「私は、一緒にお連れするように命じられていますが、これを御覧なさい」とまさしくダーティ教授の署名の、下の階への移動を指示する書類を見せた。

そのジュゼッペ・コルテの恐怖は、恐ろしいまでの怒りを爆発させ、怒りに満ちた長い叫びとなり、その階の全てに響きわたった。「お静かに、どうかお静かに」看護師長は懇願するように言った。

「ここには、具合の良くない重病の方達がいるのですよ！」しかし、彼を落ち着かせるには、何の役にもたたなかった。

ついに、その階を指揮する医師が駆け付けた。非常に礼儀正しく、優しい人物であった。医師は書類を見、コルテに何事が起きたのか説明させた。そして看護師長の方に向き直り、腹を立てたように、これは何かの間違いであり、彼は、自分が何等このような指示を出したことはない。いつの頃からか、我慢できない混乱がある。彼はいつも自分の立場が不明瞭になっている…と彼の部下に言い終わると、病人の方に向き直り、低調な口調で深く詫びた。

「ですが、残念ですが」と医師は続け、「残念ですが、ダーティ教授は少し前にちょっとした休暇に、出かけられました。二日後でないと、戻られません。誠に悲しむべき事ですが、私は、彼の命令に背くことはできません。保証してもいいですよ、おそらく最初に悲しまれるのは教授でしょう…こんな間違いがあるとは！どうして起きたのか解らない！」

今や、哀れみをそそるような震えがジュゼッペ・コルテを動揺させた。もはや自制する力は失われていた。恐怖が子供のように彼を打ちのめしていた。彼のすすり泣きがゆっくりと、絶望的に部屋に響いた。

ジュゼッペ・コルテはこうして、この様な手違いで最終の駅に来てしまった。彼の病の重さの点では、医師の判断でも七階ではなくとも、六階に入れてもらえる権利がある！彼が瀕死の重病患者の階にいるとは。あまりにも異様な有様に、ジュゼッペ・コルテは、ただ下品な声であざけり続けてやりたい気分になった。

暑い夏の午後が、大きな町の上をゆっくりとすぎ去って行く間、彼はベッドに横たわり、窓越しに樹々の緑を眺めていると、殺菌されたタイルの馬鹿げた壁や、冷え冷えとした、死者の通路と、魂の抜け殻になった白い人間の形からできる空想の世界に到達したように感じた。窓越しに見えるように思っていた樹々の緑までも、

本物ではないのではないかと、思えてきた。それどころか、木の葉が全く動いてない事に気付いて、そうと思えてきた。

この考えに、彼は、大いに動揺して、コルテは看護師を呼ぶベルを鳴らし、ベッドでは用いていない近眼の眼鏡をとってもらった。そして、少し気持ちを落ち着かせることができた。レンズの助けを借りて、本物の樹で葉も時々風に少しそよいでいることを、確かめることができた。

看護師が出て行き全く静寂の内に、十五分の時が経った。六つの階、六つの非情な壁が、形式的な間違いとは言え、今やジュゼッペ・コルテの上に退けがたい重みとなって積み重なっていた。何年間で、年単位で考える必要があったが、あの障壁の上まで、彼は何年かかって登りきることができるだろうか？

しかし、急に部屋が暗くなったのはなぜだろうか？まだ午後のまっさかりだった。奇妙なだるさが全身を麻痺させるように感じていたジュゼッペ・コルテは、必死に力を振り絞って、枕元の小さな机の上の時計を見た。三時半だった。頭を反対側に向け、鎧戸に目を向けると、不思議な命令に従って、ゆっくりと降り、光を閉ざして行くのが見えた。



「コロンブレ」挿絵（本誌第1号亀井訳）